

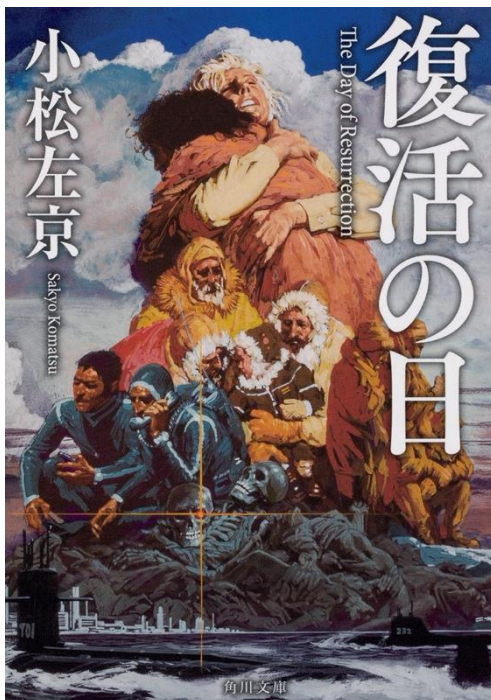
「おすすめの一冊」～高等部独自の読書案内

高等部では、例年先生方が高校生にぜひ読んで欲しい本を、輪番で紹介しています。本年度は、コロナ禍もあり、1学期は発行することができませんでしたが、先週より再開しました。

最初に本を紹介したのは、1学年の担任の松岡先生です。高等部の生徒全員に配布した文章をご紹介します。

ゆたかな感性 あふれる知性 おすすめの一冊

桜丘高等学校普通科一貫コース（高等部）



小松左京著 「復活の日」 角川文庫

このコロナ禍のなかで、本屋の店頭で平積みされるようになった。1964年に刊行された長編SF小説で、著者自身は2011年に亡くなり、若い人には忘れ去られようとしている小説が、まさに「復活」してしまった感がある。もちろん、僕自身でさえ発表当時は幼児で、この本に出会ったのは、高校生の時だ。手元にはすでに文庫はなく、Kindleで再読したのだが、驚いた。まさに今、人類が直面しているウィルスの恐ろしさをすでに、50年以上前に描いているのだ。

ストーリーはこうだ。某国家が開発した細菌兵器が秘密裏に海外へ持ち出されようとするが、それを乗せたセスナがアルプス山脈に墜落する…。その翌春、ヨーロッパでは風邪に似た症状の奇妙な病気が流行する。ワクチンも、特効薬も開発できず、致死率は100%。医療も国家も崩壊し、全世界に感染が拡大していく。人類はなす術もなくやがて絶滅の時を迎える。…しかし、南極には1万人の人々が

生存していた！彼らは、極地観測のために滞在していた科学者とその家族であった。地球に生き残った最後の人類なのだ。南極の人々は、いわば全世界の代表である「国際連合」のようなものだ。様々な対立や利害がぶつかり合うが、人類が生き延びるための知恵を模索していく。はるかに少ない女性たちは、子供を産むために複数の男性を受け入れていかなければならない。究極に置かれた人間の倫理はどうあるべきか、考えさせられる。

ここまでの設定だけでも十分面白いのだが、ここからが小松左京の真骨頂だ。日本の若き地震学者が、今後1年以内に、アメリカで巨大地震が発生することを予測。その規模は核爆発に匹敵するというのだ。南極のアメリカ代表が明かした事実は、アメリカ国防省の核攻撃報復システムは、巨大地震をソビエトからの核攻撃と自動的に判断し、ソビエトの各都市への核弾頭を搭載したミサイルが発射される、と。だが、同じシステムをソビエトが開発していないとは限らない。ソビエトからも報復としてアメリカへの核攻撃が行われるのではないか。死に絶えた人類の頭上で、核兵器だけが飛び交うという。しかし、もっと恐ろしい予測は、そのソビエトの攻撃目標の一つに、南極が想定されているのではないか…。南極に残された人々は、人

類の「復活」をかけて、原子力潜水艦に乗り込み、アメリカへの上陸を試みる。報復システムのスイッチを切るために。そして…。

小説の書かれた時代、米ソの冷戦と核開発競争の真っ只中だ。今日以上に、この恐怖は計り知れないものがあつた。しかし、南極だけが、世界の連帯と協力を必要とする理想郷となる。高校生の僕は、むしろそちらに関心があつた。だが、時代を経ても名作は、様々な顔を見せてくれる。今はまさに、ウィルスとの戦いという現実。小説でもそうだし、歴史を見てもそうだが、人類は様々な感染症と、多くの犠牲を払いながらも克服してきた。やがて人類は「新型コロナウイルス」をも克服するだろう。そのためには、この小説が描いてきた通り、全人類の叡智と連帯こそ必要だ。人々を分断するような、孤立させるような、あるいは差別するような、自国中心的な考えでは解決できない。そんなことを考えさせられる小説が、「復活の日」だ。